

<報告・記録>

陶芸を活用した教育現場における 自己発見プログラムについて

松 尾 伊知郎

東亜大学 芸術学部 アート・デザイン学科
matsuo@toua-u.ac.jp

《要 旨》

本稿は、筆者が、2024年度に自らの所属する東亜大学芸術学部アート・デザイン学科における開講科目「工芸実習」「工芸論」ならびに大学院総合学術研究科デザイン専攻博士前期課程の開講科目である「機能形態特論」において実施した「陶芸を活用した教育現場における自己発見プログラム」に関する報告である。

「自己」を発見する工芸教育というコンセプトに基づいた授業プログラムを実践し、陶芸の制作活動がいかに関個人の自己認識の深化に寄与しうるものであるのか、自分自身に内在していながら認識できないでいる特性を、目に見えるものとして表現し具現化することが出来るかを実践に基づき検証した。学外プロジェクトという、外的環境からの刺激を得ることによる内面活動の活性化、そこから表出される効果も得ることが出来た。また筆者自身にとっても、学生たちに対する新たな可能性の発見や認識をもたらすものとなった。

今回のプロジェクトにおいては、事前の予想を上回る好成果が得られ、今後の本研究に関する新たな可能性を見出すことが出来たと考える。

キーワード：工芸，陶芸，工芸科教育，自己認識，自己発見，グライズデール・アーツ，
下関市立美術館

はじめに

筆者は、2024年度の後期を通し、陶芸の活動により「自己」を発見する工芸教育をコンセプトにしたプログラムを、アート・デザイン学科の開講科目である「工芸実習」と「工芸論」ならびに大学院デザイン専攻博士前期課程の担当授業である「機能形態特論」において実施した。本プログラムに参加した学生は、学部生（34名）、大学院生（7名）あわせて41名であった。陶芸の制作活動がいかに関個人の自己認識の深化に寄与しうるものであるのか、という問いは、筆者が陶芸作家としての多年に亘る制作活動の中でたえず念頭においてきたものであ

る。本実践も、まさにこの問いに関わるものであり、今回はその一端を改めて「陶芸を活用した教育現場における自己発見プログラム」として構想した次第である。以下ではその意図と目的ならびに成果、および本実践を通して得られた工芸教育上の洞察について論じていく。

本稿執筆の根底にある筆者自身の研究課題は、受講者（学生）が自分自身に内在していながら認識できないでいる特性（個性・主張）や、何よりその制作活動を通して目に見えるものとして表現し、具現化することで、自己を再発見し、また、その認識を深めていくプロセスが生じるのを確かめることである。学びと成長が効果的になされるためには、まず、自分自身に内在している目に見えない潜在的な能力に気

づき、これを認識し、さらに、実際に活用することが不可欠となると考えられるからである。工芸の授業は、このようなプロセスを念頭に置くことではじめて有意義かつ効果的な学習となりえるのではないかと考えている。ところで、こうした工芸制作が持つ独特の契機については、たとえば現行の学習指導要領解説などでは、もはやさほど関心が払われていないようであるが、筆者にはむしろ本質的な課題であると思われる⁽¹⁾。

さて、そうした矢先、昨年度後期、近隣の下関市立美術館での特別展「グライズデール・アーツと下関—ライフパーク／人生という芸術の肖像」(会期：2025年2月15日～3月23日)が開催の運びとなり、その一貫で、本学とのコラボレーションの企画が持ち上がった。そして、美術館サイドとの交渉の中で、本学アート・デザイン学科ならびに大学院デザイン専攻の学生たちがタイル制作を通して参加することが取り決められた。その際、これを上記の自己発見の場と社会経験の場として活用することができるのではないかと考えた。学外プロジェクトという、新たな外的環境からの精神的な刺激を得ることにより内面の活動が活性化され、それが表出される効果が期待できるのではないかと思われた。

1. プログラムと各授業の関係について

なぜこのプログラムを「工芸実習」、「工芸論」、「機能形態特論」の授業において実施することになったのかについて触れておきたい。まず、3科目とも何より陶芸に関わるカリキュラムで構成されている点が挙げられる。陶芸には、①自然との接点(調和、感触、人間の五感や本能との響き)、②柔軟性と包容力による幅広い可能性と対応力がある。このことは、陶芸が学生の性別、年齢、性格、個性を問わずあらゆる人と条件に対応し、各学生に内在する能力を引き出すことが出来る可能性を宿していることを示している。

上記の授業では、いずれも授業者のそうした基本的な意図を踏まえた上で、それぞれ学部や

大学院での固有の目的に沿ってその目的や内容が規定されている。各授業の内容及び目的について簡潔にまとめると以下の通りである。

○「工芸実習」:

本授業は、学部の2年次後期に開講しているもので、陶芸の基本的な制作技術による日常食器の制作を通して、陶芸の一般的な理解およびその基礎的な知識と技能の習得を目的としている。この中で、学生たちは、具体的には①上記の知識と技能のほかに②土こね技術を習得する。その上でさらに③紐づくりによるカップ、湯呑、お碗、花器などの制作を行い、次いで④たたらずりによる皿、筒型の制作などを行うことで、それぞれのプロセスにおいて必要な技術をその都度身につけることになる。またその一方で、本授業は3年次の前期に開講される科目である「陶芸」にも繋がる内容になっており、2年次後期からの1年間を通して陶芸の基礎ならびに応用を学び、更に3年次後期に設置されている「特別研究」、4年次開講の通年授業である「卒業研究」へと続くよう、授業相互に関連性を持たせ、全体として一貫性をもった学びのプロセスの一部として構想されている。

○「工芸論」:

本授業は、学部3年次後期に開講されているもので、その都度陶芸に関する個別のテーマを設定し、それらの研究を通して理解を深めることを目的としている。当該年度には、有田焼を中心とする陶芸に関する講義を実施し、そこで得た知識に基づいて研究レポートを作成することを課題として課した。そこでのテーマとしては、具体的には有田焼を中心とした陶芸の産地について、中国と韓国を含めた陶芸の歴史と相互の繋がり、それぞれの重要な作家という3つの領域に焦点が当てられている。その際、次の5点が主要トピックスとなる。①有田焼とは何か、②有田焼を代表する陶芸家たち、③有田焼の歴史と現状、④有田焼以外の陶芸産地と作家、そして最後に⑤これらについての学習に基づいたレポート作成である。

○「機能形態特論」:

本授業は、大学院1・2年次の後期に開講している科目で、陶器における器の機能とデザインをテーマとし、受講生は実際に自らデザインした器を制作し、その機能などについて検証するというのがその主たる内容である。

しかしながら、2024年度の後期に関しては、下関市立美術館とのコラボレーション企画である上記の特別展「グライズデール・アーツと下関—ライフパーク／人生という芸術の肖像」に授業での制作を通して参加することが決まったこともあり、一度限りの例外措置として、本来の内容をそれぞれ一部変更し、授業内容を構成することにした。これは本稿のテーマである「陶芸を活用した教育現場における自己発見プログラム」の構想にとっての好機であるだけでなく、同時にそれぞれの授業が目的とする陶芸の基礎的な技能の習得およびその活用という課題について、一層幅広く、深い射程において探求することができるという意味でも、またとない機会であるように思われた。授業進行に関しては、どの科目においても全15回授業のうち8回を今回のタイル制作にあて、残りの7回を通常カリキュラムを一部短縮した内容で実施した。上記の本稿のテーマに美術館とのコラボレーション企画を組み合わせることによって、より高い教育的効果が得られることが期待された。

2. 本プログラムの訴求点と美術館とのコラボレーション企画

以下ではあらためて上記のプログラムの位置付けと意義、美術館の企画の詳細を説明し、制作の流れとプロセスについて見ていくことにしたい。

まず、本教育プログラムの目的と意義、期待される効果とその位置付けについて説明しよう。ここには、少なくとも以下の3つの訴求点があると考えられる。第一は、企画自体の「新規性」である。大学の授業を産学連携のプロジェクトと組み合わせ、その上でさらにその中心に陶芸（芸術）制作を置くというのは、これま

での大学教育では恐らくさほど前例のない構想であるに違いない。大学での授業を通して、学外の活動との接触が生まれる。しかも、それは海外で活躍する第一線のアーティストとのコラボレーションである。これを契機にこれまでにない新鮮な経験が可能となり、広い視野が得られるという効果が期待されることになる。第二は、それに加え今回の企画は、その制作活動を、自己の内面に存在するが見えない精神性や個性に気づき、自己認識のための契機とすることで、そこから得られた新たな発見を学生の学びに効果的に活かす、という工芸教育上の配慮によって支えられている。第三は、「社会の中での人間間の関わりとその必要性」という観点が挙げられる。至る所で旧来の様々な物事が行き詰りを見せているのが現代の社会である。そうした中であって、今後一体何が必要とされることになるのか、求められるのか。本企画は、大学の授業を産学連携のプロジェクトとドッキングさせることで、そうしたアクチュアルな問いについて学生たちを誘い、本制作活動の経験を通して若い人材の能力を効果的に発揮させることで、社会に対して新たな提言を生み出す可能性をも内に含んでいる。その意味で、このプログラムには「未来への提言と可能性の提示」というアспектが含まれているのである。それによって、個々の人間（この場合受講学生）が社会を構成する枠組みの中で生きるために必要となる資質や能力を効果的に引き出し、結果としてよりよい社会を構築すべくそうした人材をその能力とともに社会に還元する、というビジョンも宿している。

続いて、制作活動の課題とプロセスを説明する前に、今回のコラボレーションの対象となった特別展「グライズデール・アーツと下関—ライフパーク／人生という芸術の肖像」についても簡潔に触れておきたい。「グライズデール・アーツ (Grizedale Arts)」とは、イギリスの現代美術シーンで活躍するアーティスト集団である。イギリス北部の湖水地方にその活動拠点を置いている。19世紀イギリスを代表する批評家ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819–1900) らの思想の影響を受けつつ「日常に役立

つアート」を理念に、エコロジー的な要素の強いソーシャル・エンゲージド・アート (Social Engaged Art) としての制作活動を精力的に展開している。日本では、コロナウイルスによるパンデミックが勃発する以前の 2017 年に、山口県下関市菊川町などで行ったプロジェクトがなお記憶に新しい⁽²⁾。そこでは、とりわけ同アートグループのメンバーで、下関生まれの写真家でもある藤田需子氏が仲介として大きな役割を果たしており、今回も本展覧会のため、帰関している。

藤田氏を交えての展覧会の企画ミーティングを通して、次第に本学の学生たちの制作テーマのアイデアも固まってきた。その際「蜂の啓示」というテーマがグライズデール・アーツのサイドより要望として提示された。それは、藤田需子氏の人生のターニングポイントとなった蜂との出会いがベースになっているということであった。それを参考に、個人的な体験に基づいたものをテーマとする創作活動であることが望ましいということで、本学ではその制作テーマを「Epiphany, おもい, 人生のターニングポイント」とすることにした。「エピファニー」とは、啓示的に突如として深まる理解のことを示している。まさに、本プログラムの精神をシンボリックに表現したものだといえる。

3. 制作のプロセス

「工芸実習」、「工芸論」、「機能形態特論」の三つの授業を通して特別展「グライズデール・アーツと下関一ライフパーク／人生という芸術の肖像」のためになされた作品制作のプロセスについて、以下につぶさに見ていくことにしよう。

上記の制作テーマのもと、グライズデール・アーツのアーティストたちとの交流の機会をセッティングするという可能性も念頭において、本学の学生たちには以下の規格でレリーフ状のタイルの制作に取り組ませることになった。今回の制作の枠組み条件ということになる。

形は六角形として全体で統一することにした。一辺 15 cm の六角形タイルである。それ

以外の色や絵付け、レリーフの造形モチーフやそのスタイル、装飾などについては各自の自由な創作に任せることとした。ただし、安易に制作するのではなく、各自のエピソードをしっかりと掘り下げて考え、創作することをあらかじめ確認しておいた。参加学生は、すでに上記にも触れた通り、学部と大学院合わせて 41 名である。各自が 2 点ないし 3 点作成することを念頭において準備を進めた。したがって、予想では約 130 枚のタイルになるはずであった。展示計画については、作ったタイルは一ヶ所にまとめて展示するのではなく、館内の複数の場所に点在させて展示するという案を考えていた。以下では具体的な制作の進行に沿ってその展開を追っていく。

1) 題材の内容と制作の意義についての説明：

各授業内でプロジェクトの内容と意義について説明し、課題を明確に理解させるよう努めた。

2) 各自によるテーマとモチーフの設定：

学生に上記の大枠のテーマに沿って、自らの記憶を遡りながら呼び起こし、その中から自らの制作テーマを選び出させることにした。こうして心象風景が醸成されることになる。その際、なぜそれを選んだのかについても十分に自覚させることとした。その心象風景を各自がタイル制作を通して具現化するのである。学生たちは、ある程度イメージが定まったところで、それをデッサンを通して客観する。この活動の中で、自ずと自らの内面を見つめなおすことになる。そのイメージは、受講生それぞれに個性があり性格も異なるように、感性も様々である。そして、それぞれが多様な記憶を持っている。そこからおのずと無限の多様性が生じてくるはずである。

3) イメージ・デッサンのプロセス：

自分が選択した上記のテーマをいよいよ具体的にイメージ化する作業である。受講生は、あらかじめ用意された六角形の輪郭のみが印刷された紙にアイディア・スケッチを行う。それ自

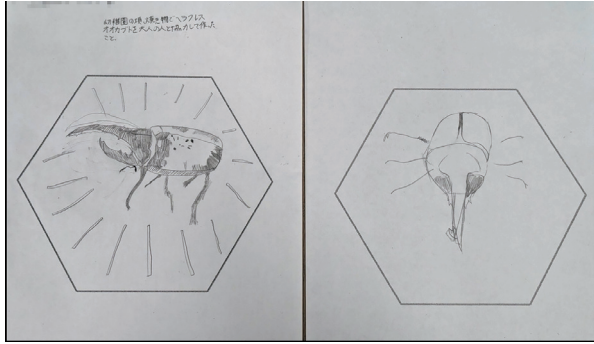


図1 学生イメージデザインI

体としては、当初は曖昧な記憶を具体化していくプロセスである。この段階では、あまり深く考えすぎず、まずは思い切って形の中に記憶を描き出すよう指導した。そして、一枚だけに終わらず、なるべく多くのアイデアを描き出してみることを勧めた(図1)。この反復、すなわち繰り返す作業の継続の重要性は強調しておきたい。というのも、アイディア・スケッチを繰り返し描きながらその際に多かれ少なかれ内省がなされることで、自分が気付いていない内面もおのずと引き出されてくるからである。すなわち、この作業を通して自己の確認がなされ、表現としてそれが確立されていくことになるのである。さて、ここでは極力制作するタイルのデザインと同時進行で、形や色などについても考えることを指導した。そして、最終的に1人あたり少なくとも2点から3点の案をつくることとした(図2)。

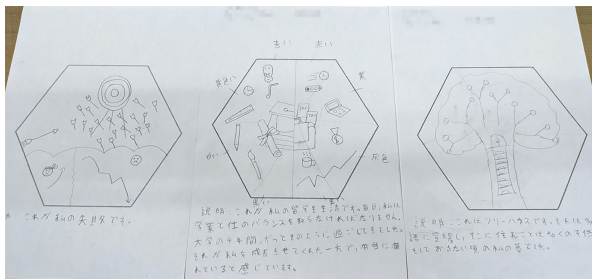


図2 学生イメージデザインII

4) 土捏ね：

デザインが決まったところで、いよいよ制作に入る。まず粘土内の空気を抜き、捏ねることで粘土の状態を整えるところからはじめなければならない。陶器の場合、焼くことによって大

きさが概ね1割から2割程度縮むことになるため、重要な工程である。

5) 粘土の引き伸ばし：

土捏ねが終わると、次にセルローラーを使って板状に引き伸ばす作業を行う(図3)。



図3 タイル制作

6) 粘土のカット：

板状になった粘土板にあらかじめ用意した型紙を当ててカットする(図4)。これでタイルの下地が完成したことになる。ここで型紙を使い板状粘土からカットした粘土生タイル(図5)と焼成後タイルと重ねておいてみると、その大きさの違いがよりよく理解されるに違いない(図6)。



図4 型紙とナイフ



図5 粘土生タイル



図6 生タイルと焼成後タイル

7) 下地タイル上の造形：

下地タイルが出来上がったところで、アイデア・スケッチに基づきながら、その上から粘土を盛りつけながら造形していく（図7, 図8）。



図7 制作風景Ⅰ



図8 制作風景Ⅱ



図9 制作風景Ⅲ



図10 制作風景Ⅳ

が最終的に終わったところで、完全乾燥させるのである（図11, 図12）。

8) 生乾きの状態とその後の制作：

ある程度粘土を盛りつけ終わると、そこで幾分乾燥させ、生乾きの状態にする。これは、粘土が水分を含んだ状態でありながら、乾燥して若干硬くなっている状態のことである。この生乾きの状態が、実は粘土で形を成形する際に一番重要な段階である。この粘土の盛り付けと乾燥とを繰り返しながら、最終的な形に仕上げていくことになる（図9, 図10）。そして、成形

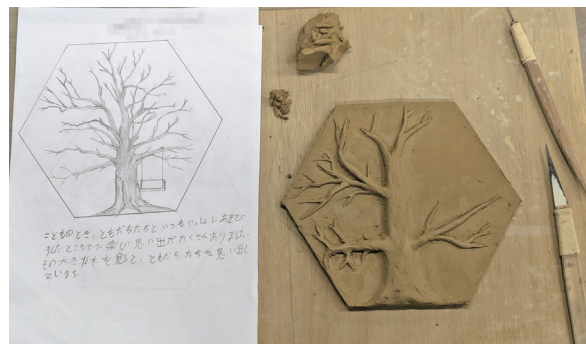


図11 学生制作タイルⅠ

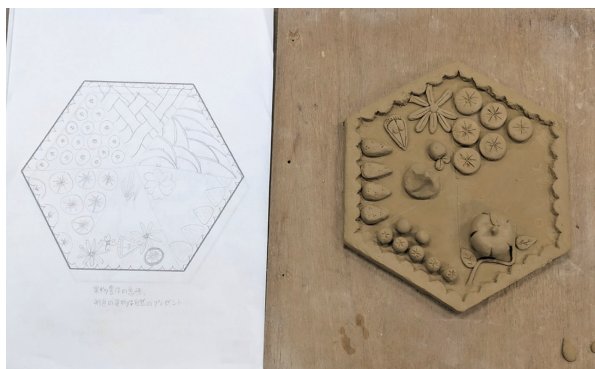


図12 学生制作タイルII

9) 素焼き:

タイルが完全に乾燥した後に(図13, 図14), 1回目の焼成である素焼きを行った。こ



図13 素焼きタイルI



図14 素焼きタイルII

のときの窯の温度は750℃, 焼成時間は8.5時間である。

10) 絵付け(図15, 図16)

5色の下絵の具を使用して、自分のイメージに沿った絵付けをおこなう。



図15 絵付けI



図16 絵付けII

11) 釉薬掛け（図 17, 図 18, 図 19）

透明釉の釉掛け。適度な釉薬の厚みが必要となるため、道具と作品の持ち方、手の動かし方を指導する。施釉後は各自裏面、側面の余分な



図 17 施釉



図 18 施釉工程 I



図 19 施釉工程 II

釉薬を濡れたスポンジを使い取り除く。釉薬の製造は筆者の調合により製造。

12) 本焼き焼成

電気窯において 1240℃, 10 時間で焼成した。作品に使用した粘土, 及び釉薬は焼成に関しての自由度が高いものであった。しかしながら今回のタイル作品は学生が自由に制作したため、粘土の厚みの違いが多く出ることとなった。そのため、慎重を期するために作品は厚みがあるものを下段に積み、薄いものは上段に詰めた。これは焼成時の温度上昇と下降を考慮してのことである。電気窯は丸二陶料製造の横開き台車式であり、マイコン自動制御装置は株式会社福澤工業製。

13) タイル完成

焼成終了後に 72 時間の冷却時間を取り、窯内部温度が 50℃を下回った後に窯出しをおこなった。制作工程において一部破損したタイルが生じたが、最終的には全員無事にタイルを完成させることが出来た。

14) 美術館における展示と制作発表：

作品完成後、いよいよ美術館での展示となった。その際、会場内の展示の具体的なコンセプトについては、原則グライズデール・アーツのサイド、わけても藤田需子氏の意向に沿うものとなった。本学から持ち込まれた約 120 枚におよぶタイル作品は、一階展示会場の入り口を入って左サイドの半楕円形の展示台二台の上に設置された。そして、会期中に設定されたトークイベントの当日は、講堂で発表会が催された。そこでは、制作に参加した学生たち 6 名がそれぞれ制作にあたって作品に込めた各自の想いやメッセージを自らの言葉で説明した。美術館という公共の場で、しかも一般の来場者の前で発表することができたことの意味はやはり大きい。参加学生の中には、日本語になお課題を残す留学生や、平時であれば人前で発表することに困難を感じる学生もいた。それでもこの日ばかりは、彼らもそれぞれ事前に発表内容を考え、果敢に作品説明に挑んでいた。その意味

で、今回の制作が自己発見だけではなく、自己の自立という面においても一定の効果を上げているように思えた（図20，図21，図22）。今回、当初予定していたグライズデール・アーツ



図20 美術館での学生トークショーⅠ



図21 美術館での学生トークショーⅡ

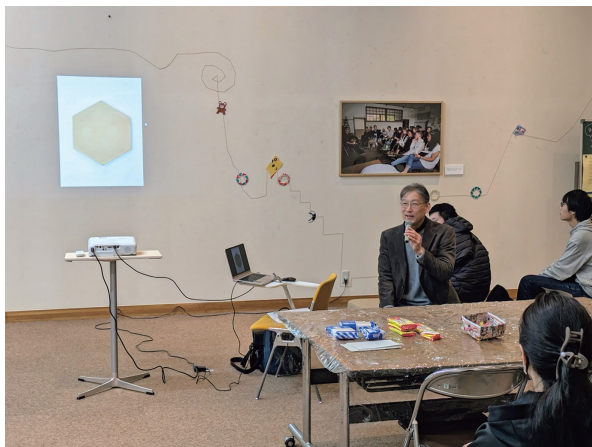


図22 美術館での筆者によるスライドレクチャー

のアーティストたちとの共同制作は、美術館側の事情により生憎実現しなかったが、それが叶っていたら、学生たちにとってさらに大きな経験となったであろうことは想像に難くない。

4. プロジェクトの成果と展望

最後に、本プロジェクトの成果について考えてみたい。今回のプロジェクトでのもっとも大きな成果は、やはり学生自身が制作や展示のプロジェクトを通して、今まで知らなかった、あるいは気が付かずにいたものに出会ったことである。自分の記憶の中から過去のイメージを呼び覚まし、膨らませ、それをあまり思考を介在させないで繰り返しイメージ・デッサンすることで表に出てきたものがある。それをもとに実際に「かたち」ができあがってくると、今度はそれを視覚的に認識することを通じて逆に自己の確認がなされることになる。改めて形になったものを見ることによって、自分自身についての新たな発見がなされるのである。そして、これらの自己確認作業によって更なる発想の広がりが可能となる。それは、受講生たち自身にとって内省の契機となり、今後進むべき新たな方向性を見極めにも結びつく。そればかりでなく、授業者である筆者自身にとっても、「この学生にこんな繊細な一面があったのか」というような、学生たちに対する新たな発見や認識をもたらすものとなった。たとえば、日本語が拙く、他の授業ではあまり際立った集中力を見せることのない留学生が、本課題では意外にも繊細で個性のある作品を仕上げてみせるというケースもあれば、こちらの予想以上にユニークな色彩感覚を見せる学生、優れた立体的感覚を持っていることが明らかになった学生、本来デジタル系のデザインを専攻しているにもかかわらず、同時に巧みな立体造形感覚を有しており、予想外に際立った造形上の成果をみせた学生もいた。

今回プログラムを実施した「工芸実習」「工芸論」「機能形態特論」の三つの授業は、本プロジェクトのため、通常のカリキュラムを後半7回に短縮して行うことにはなった。しかし、

それらは結果として8回のタイル制作を踏まえた後での制作となり、興味深いことに全15回で構成された通常カリキュラムの手順で得られるものとは異なる成果が得られた。とりわけ、受講生は短い時間での技術習得が可能となり、形の作り方や絵付け、釉薬掛けなどに至るまで、それまでとは違う表現や感性の発露が見受けられた。

その意味でも、十分な効果があったように思われる。また、美術館とのコラボレーション・プロジェクトを終えて改めて感じたことは、それぞれの学生には限りない潜在的な可能性が秘められているということである。本学の特色として、日本人と留学生はもちろんのこと、更に国籍を問わず様々なバックグラウンドを有する学生達がいる。その彼らが一つのテーマのもとに各々の制作をおこなった。そこから生まれた作品には、制作プロセスや完成作品において、事前に想定した以上の成果が表れた。このことは学生自身が最も感じていたのではないかと筆者は考える。

本稿の冒頭で説明した「陶芸を活用した教育現場における自己発見プログラム」は、これまでも筆者の教育活動において一貫して重要な指針の一つを成してきた。そして、上記に見てきたように、今回のプロジェクトにおいて事前の予想を凌駕する好成果が得られたことは、改めてその有意義性を裏づけるものであるように思われる。しかしながら、過去の記憶を具体化するプロセスや、粘土で形を成形するための技術の取得に関しては、他にもなお効果的な方法が存在すると考えられる。それゆえ、今後も引き続き、このプログラムが教育現場においてより有意義な方途となるよう、一層研鑽を積んでいきたい。

謝辞

なお、本報告書の執筆にあたっては、同僚の清永修全氏より編集上のさまざまな助言をいただいた。記してお礼申し上げる。

註

- (1) たとえば『高等学校学習指導要領解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編・音楽編・美術編（平成30年告示）』では、「芸術科工芸の学習は、表現や鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、自身の価値観を形成するとともに、人々の生活や社会と密接に関係する学習である。表現や鑑賞の活動を身近な生活や社会の中で考え、つなげ、生かしていくことで、工芸の働きについて実感的に捉えられるようにし、主体的に生活や社会の中で工芸を生かしたり、探求したり、心豊かにするために工夫

する態度を養うことが求められる。」（文部科学省（2018, p.194））としながらも、筆者が本稿で語るような自己発見のプロセスについては、立ち入った言及は見られない。

- (2) 下関市立美術館による同企画のチラシを参照のこと。

参考文献

文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編・音楽編・美術編（平成30年告示）』

Self-discovery Program Using Pottery in Education

Matsuo Ichiro

The Department of Art and Design,
University of East Asia
matsuo@toua-u.ac.jp

Abstract

This paper reports on the “ Self-discovery program using pottery in education “ which I implemented in the 2024 academic year in the courses “Craft Practice” and “Craft Theory” in the Department of Art and Design, Faculty of Arts, East Asia University, where I am currently affiliated, as well as the “Special Course in Function and Form” course in the Master’s Program in Design, Graduate School of Integrated Arts and Sciences.

This lesson program was based on the concept of craft education as a way to discover the self. It examined how pottery production activities can contribute to deepening individuals’ self-awareness and enable them to visually express and embody traits inherent but unrecognized within themselves. By receiving stimulation from the external environment of the off-campus project, students were able to activate their inner activities and experience the positive effects that resulted from this.

For me personally, it also led to the discovery and recognition of new possibilities for my students.

This project achieved results that exceeded my expectations and uncovered new possibilities for future research.

Keywords: crafts, ceramics, craft education, self-awareness, self-discovery,
Grizedale Arts, Shimonoseki City Art Museum